

月刊健康一三三二号別刷

医者が開発した新農法

国際医農学会会長
水戸短期大学教授

高倉 熙景

医者が開発した新農法

筆者は医学的立場からいちはやく農薬の乱用を警告し健全食糧を作る新農法の開発を進めてきた。そのユニークな方式は農薬を排除し、たばかりでなくかずかずの成果を挙げている。

高倉 熙 景



健康な食物は健全な農法から

満腹することだけが栄養摂取法ではなく、カロリー、ビタミン、アミノ酸説に立てこもることが栄養論だとは思われない。

私の主宰する医農学では、生態学的に必要な種類の食べものを、人間に与えるという主義から、食事の材料論を重視し、作物の作られる諸条件の適否や方法や経過を問題にしているの

ある。なぜならば、せつかく材料をそろえて調理されても、有害材料であったら危険この上もないからである。これに該当するものが有機水銀、有機塩素、有機燐、除草剤などの農薬残留毒や、カドミウム、シアン、PCBなどの工業廃棄物で汚染された農作物その他である。また、作物が育てられてゆく経過の中の欠陥を知らないと、栄養価値の乏しい材料を押しつけられることになる。これに該当するものの代表が、微

量要素（ミネラル）欠乏の疲弊耕地から穫れる農作物で、これらには主成分もビタミンもホルモンも足りないものが多いのである。私は、この二種を、悪材料の双壁と警告し、その解決を研究しているものである。このような現代食事は法の欠陥を検討しようとするれば、食糧関係の毒物学や農薬学やミネラル学のような新しい学問を知らなければならぬのだが、残念ながらいづれも開発がおくれている。

医農学はこうして生まれた

医農学とは、終戦直後の同胞飢餓の渦のなかで、私がマルサスの人口論に啓発され、日本の人口の推移と日本農業の行く末を憂い、更に農薬乱用農法時代の到来を予知して、これらの対策を、医学的立場から農学者や農業界に具申する資料としてまとめあげた理論体系である。医学と農学が、これまで全然協調なしに来たことを不可とし、二つの学問の接点を広く見だし、人間と農作物の因果関係を詳しくさぐり、医学

・農学の協調のもとに、真の健全食糧を作ろうという主張であり、健全食糧とは清浄で成分の高い作物を指すのである。

具体的には「人間の健康体をつくるために作物の本質を充分發揮できる成分を持った農作物を作って供給してほしいこと」と「有害な農薬を減少または必要としないような農業技術の研究を進めてほしいこと」の二つの願いを、農業界に提示し協力を乞うたのである。しかし、これに対する反応は、長期にわたる弾圧と言語に絶する妨害であった。

われわれには、自力による研究継続と証明の道しか残されていなかった。微量要素は、そういう中で選定した研究テーマの一つで、地球的規模で生物の生育を研究する鍵となり、医農学の根底をなしたものである。

それから四半世紀、茨の道を歩きつづけてきたが、研究もどうやら生存を続け、国内はもちらん十数か国の外国をふくめ約十万人以上の同志の交流が生まれ、いくつも外国大学で医農学

の紹介をした。また、わが国で最初の茨城大学公害講座の開設にあたって、その主幹に任命されるなどの奇しき運命に遭遇した。

世界的な食糧危機を前に

日本の世情もずいぶん変わった。うちつづく公害の頻発や公害病の多発、広汎な農薬残留毒性の発現などから、先ず大衆の関心が急速に高まり、政府も黙視できなくなつて、ついに不備ではあるが公害の政府管理体制が布かれるようになった。私が研究をはじめた当時を思えば、まさに隔世の感を深くするものだが、医農学会が世に訴えてきたことがようやく理解されるようになったと言えるだろう。

最近の世界の重要課題は人口爆発と食糧不足であるが、氷河期襲来傾向と農作物減収への危惧が深刻となるに従い、役人や学者の中にも真剣に日本の食糧生産の現況や必須食糧の外国依存の危険性を憂慮する人達がふえ、食糧自給対策の検討がはじまった。摂取カロリーの改変、

食糧の品種の選定、栽培品目の変更、食品内容の検討などが叫ばれるに至つたが、これらにはわが学会の古くからの主張にほとんど合致しているのである。

先ごろローマにおける国連の食糧会議で、開発途上国の飢餓対策の優先と、七千万トンの救済食糧備蓄が提案され、日本も協力を要請されているが、現在の日本の食糧実力を考えると、どこにそのような優位を発見し得るであろうか。

最近、石油問題の外交的武器として中東産油国に対する米洲圏の農産物供与が話題となっているが、そうなつたら食糧輸入国日本も影響をまぬかれない。自給農法がますます真価を発揮する時である。

このような情勢を反映してか、食糧研究に対する当局の心づかいは、ここ数年来かずかずの緩和策の中にあらわれている。長い間反対を受けていた私どもの研究が、昭和四十六年農林省機関誌に発表されるに至つたが、それ以来、公式テスト協力者が増加している。

医農学式方法による栽培成果

医農学による作物づくりの要訣は、疲弊耕土に対し、従来の施肥法の外に、本学独自処方方の微量要素総合体（農林省登録）を加用することである。それにより、作物は生態学的に健常で病虫害抵抗の強いものに育ち上がるのである。

作物の作りかえは、つぎつぎ興味ある事実をわれわれに示している。

例えば、医農学の方式で作られた玄米（茨城農試）では、粗蛋白が三〇四％増、ビタミンB₁が六〇八％増、ビタミンB₆が九〇一八％、ビタミンB₂は五〇％増を示し、更に増加の傾向である。これは近く予想される食糧難時代に、米不足を内容的に補えるもので、量の節約にも役立つものと期待されている。

医農学の方式で作られた緑茶（国立茶業試験場）は、含有アミノ酸総量が四〇％以上も増加した。中国から薬品として渡来した緑茶が、日

本で嗜好品と変わり、このたび堂々と食品価値を高め、将来の飢餓時代に立派な同胞救済食の一つとなり得る可能性を示しているのである。「緑茶は食なり、くすりなり」——これは私が、緑茶に捧げた標語である。

また、医農学方式による薬草栽培では、生薬各種の主成分向上を認めている。

例えば、漢方煎剂処方方の六〇七割に混和されるという柴胡（さいこ）の主成分メタノールエキスは、一年生根で四・五％増加、二年生根で二・六％増加（徳島大学薬学部）を示している。この事実は、将来の世界的な漢方流行の中で憂慮される生薬の流通困難の解決に必ず役立つであろうことを示している。

このように、はじめに記した食糧の材料である作物の、農薬排除と、内容の充実した作りかえは、新しい学問である医農学の信奉者たちの勇敢な研究と実行によって可能となったのである。

（国際医農学会会長・水戸短大教授・医博）